

想



随

—らしくない話—

阿蘇 惟 友

—その一— 熊本のスタンドで。
「やっ?先生、ブランドーですか。
御神酒は神代の昔から日本酒とばかり思
うたに」

花火の店、金魚すくい、綿菓子をつく
る機械を踏んでいる人、いかの串焼、玉
蜀黍の焼ける匂い……。
最近、決してあと引きしない醤油差し
というものを買ったら、年寄りが、
「こら昔の醤油ビンたい」
と言われておどろいた。

この頃は家具、調度品、食器類も変わ
った形のいわゆる前衛的な物より、昔な
がらの倉の奥から引っぱり出されたよう
な、ごついものに人気がある様である。
アンティークファッションと言われてい
る。古めかしい「びいどろ」「手まわし
蓄音機」「六角形の柱時計」「自在鉤」
「ランプ」「オイルライター」等々。
新しいものから新しいものへと次々考
えられる色々な物のデザインも、それに
馴れてしまった現代の人の目も、行きつ
くところまで来たという感じ。
今まで見向きもしなかった古いもの、
稚拙なものに、かえって新鮮さと魅力
を感じるのかもしれない。

夜店という時代があったものも、その
一つであろう。また、楽しんで行ってい
る子供達も、やがて大人になった時どん
な思い出を持つのだろうか。
古いものと、うらはらに日に日に新し
いものも考えられ、研究され、機械、医
学等すべて私等は理解出来ないよう刻々

—その二— 焼鳥屋で。
「どうか神さんの焼鳥は食べよらすバ
イ」

—その三— 某ナイトクラブにて。
「阿蘇先生といたしたら、神罰で、腫
れるのじゃありませんか?」
—その四—

「わたしは、初め、神主さんの話です
から結婚式などでよく見かける例のおは
らい姿でみえるのではないかと思ってい
ました。ところがどうでしょう、モダン
な背広姿で来られたのでびっくりしまし
た。わたしは神社の形態などせんせん無
知なものですから、神主さんなんかして
飯が食えるのかなあーと思いました(中
略)こんな神主さんの話を二時間も聞く
のは嫌だなあと思っていました。なる
ほどこういふことかなあ、段々わかっ
てきました。(某銀行新入社員研修会の
感想文)

× × ×
しゃべったり、書いたりして、早いも
のでもう二十年になる。

ひと頃、食べものに凝って、「随筆く
まもと」に何回か連載した。

ところが、神主ともあろうものが食べ
ものことなどかいてクダラン、という
輩(やから)がいたということである。
神主のイメージからすれば、突飛に見
えたのかもしれない。
いわゆる「らしくない」ということ
だ。

だが、クダランとかクダランとかそもそ
も、何をものさしにしての批評だろう
か。

かの吉田松陰先生が、「ふぐを食わざ
るの記」で「いやしくも飲食の小をもつ
て死生の大を致す」と論じたのを宇都宮
黙齋先生は、

「飲食は小にあらず、生を致すゆえん
にして大なり」と決めつけた。

うまい料理ほど、日々の生活を豊かに
するものはない。

すぐれた料理術は言葉の正しい意味で
「文化」なのである。

それをクダランとは、なんぞや。
思うに——。

神道の理想とは、
「畏敬と、親愛の矛盾の統一につきる」
とわたしは、固く信じている。

ところが——。

世間一般の風潮からすると、畏敬のほ
うにウエイトがかかっているようだ。

「らしくない」といわれるゆえんであ
る。

だが、神職だからと、そねばったり、
肩意地をはることはさらさらないと
思う。

伝統や格式は厳として守らねばなら
ないが、その基調に立って、いかに、親
まれ愛される神社・神職に脱皮してい
かについて考えるべきであろう。
(阿蘇神社宮司)

夜市

本田 弘子

「帯山の踏切り夜店も鬼もいて」
帯山町の某家での句会に出されたYさ
んの句である。

渡鹿の方から踏切りを渡ると夜店が並
んでいた。そこをぶらぶら抜けていく時
古い情緒への郷愁が「鬼もいて」とい
う童話的な表現になったのである。

近頃、夕暮れの町を通るとテントを張
ったり、品物を並べたりして夜店の準備
が一生懸命されている情景をみかける。
小学校の頃、友達か

「今日は急いで帰ろー」。 「どうして
?」。

「夜店の出るもん」と、そそくさと
帰っていた。

私が育った神水の奥には、江津湖と畑
はあっても夜店はなかった。

先日、丁度夜店の前を通ったので一軒
一軒のぞいて歩いた。

「折墨の紋」

高木 盛 義

と進歩している世の中でもある。
すべてが新しく便利になる世の中とい
うこと、それは又味も素っ気もない世の
中でもあろう。
さて今夜は、新しいもの、古いもの、
渦の中から抜け出た谷間で線香花火をし
て、楽しい一夜を過そう。
(山鹿市教育委員)

江戸時代の儒者山鹿素行に、「直(真
実)とは、是を是とし、非を非とし、敢
て自を欺かざるの謂なり」という至言が
ある。
× × ×
ややもすると、清正公を語る場合、武
の清正公に終始し、文の清正公、治水の
清正公、誠実有徳の清正公、芸術文化の

理解者清正公に触れない歴史の伝承は、
清正公の真実をゆがめる憂いなしとしな
い。
× × ×

清正公使用の紋所が三つある。「蛇の
目」、「桔梗」、「折墨」の紋である。
前二者は周知されているが、折墨の紋は
知る人も少ない。これを証するものに、仏
師康照彫刻の神殿安置の清正公像、細川
家蔵の公愛用漆時絵の湯桶等がある。中
でも明瞭なのが清正公愛読の本妙寺所蔵
重要文化財「日本紀寛宴和歌上下二巻」
の巻首、巻末、天地押界及び紙背にある
「継印」の折墨紋である。

× × ×
日本紀寛宴和歌集とは、大昔、日本書
紀進講が終わったあと勅して宴を催され
た時の和歌である。日本書紀の中の神名
や人名を詠題としてのおの詠進した和
歌を認めたもので、上下二軸の紙本墨書
である。上巻は一六・九八三頁、下巻は
一一・五一九頁、幅二七・八寸で、上巻
には、「肥後州星山書庫兩軸三内此一軸
墨附三十巻紙也、毎紙継印有之」と記さ
れ、下巻には、「二十三紙」となってい
る。上巻の巻首に、養老五年より承平六
年に至る六度の日本紀講例を示し、つき
に元慶六年の寛宴歌、続いて「日本紀寛
宴歌延喜六年」とあり、三十六人の詠歌

× × ×
四十首が収められている。下巻には「日
本紀寛宴和歌天徳六年」として三十七人
の詠歌四十一首が収められている。墨書
の筆致は優麗高雅、若々しく、瑞々しさ
に溢れる「宗尊親王」の筆である。親王
は後嵯峨帝の第一皇子で深深草帝の猶子
となり、建長四年、鎌倉六代將軍に任せ
られたが文永三年薨せられ、後出家、文
永十一年八月薨せられている。和歌は定
家の子為家に学び、「瓊玉集」十卷等が
あり、鎌倉中期の代表的能書家として知
られ、「寛平歌合」等の御筆がある。
清正公が折墨の紋を併用され、「日本
紀寛宴和歌集」を愛読されたことには、
公郷西洞院時慶の存在がかかり深いよ
うに思われる。「時慶郷記」という本に
清正公が時慶に親近され、和歌の指導を
受け、時慶の袍を贈られて着用されたこ
とが記されている。時慶が家職の紋折墨
を清正公に贈り、清正公はこれを文にお
ける紋所として使用されたものと考えら
れる。「寛宴歌」も時慶が贈ったものを
秘蔵愛読されたものであろう。
× × ×
歴史は表裏、上下、左右からみてその
真実を確かめる要があり、そこから「歴
史の語る心」に気付くことができよう。
(郷土史家)